



近代美術評論家

森口多里

森口多里（本名多利）は一八九二年（明治二十五年）年七月八日、水沢町大町（現・奥州市）で金物商を営む父森口伊三郎、母カネヨの次男として生まれました。一九一〇年（明治四十三年）一関中学校（現・一関第一高等学校）を卒業、同年、早稲田大学文学部予科に入学した。

早稲田大学在学中、洋画、彫刻、工芸史の勉学に専念しました。恩師佐藤功一より美術品の調査を頼まれた。森口は日本画の大家や華族、財閥、旧家などを訪問し、収蔵されていた名品を堪能した。その経験は彼の美術眼に影響を与えた。また、日夏耿之助の主宰する同人誌『假面』同人となり、文芸活動にいそしんだ。

一九一四年（大正三年）三月、早稲田大学文学部英文科を卒業し美術評論活動に入った。当時はヨーロッパ美術の受け入れ時期だった。ヨーロッパ美術を学ぶことが中心で、また日本には専門の美術評論家は皆無に近い状態だった。

森口は早稲田大学理工学部建築科講師となり、工芸史を担当するかたわら『ミレー評伝』の翻訳や『異端の画家』『美を味わう心』『近代美術一二講』『恐怖のムンク』などの著書で最新のヨーロッパ美術を紹介した。また、パリのソルボンヌ大学文学部に留学し、フランス・イタリア・スペインなどの美術と建築について研究し、その間に農民童話『黄金の馬』や『ローマ文化と建築』などを出版した。また、美術史学研究も手がけた。さらに、日本在来の美に対しても民俗学研究や民芸運動などの形で関わり、その活動領域は非常に幅が広がった。

結婚後、東京に住んでいた森口は、評論、著作活動を盛んに展開していた。しかし、太平洋戦争が激しくなり、連日のように東京は空襲を受けるようになった。一九四五年（昭和二十年）五月の空襲で森口の家は焼かれてしまった。家財や多くの文献・研究資料・フランス留学から持ち帰った美術資料なども一緒に焼け、森口は落胆した。

黒沢尻町（現・北上市）に疎開した森口は、地域の人々が神楽などの伝統芸能を捨てて、現代的な踊りにばかり目を向けるのを目の当たりにして残念に思った。そのため伝統芸能などの調査と保存のために、そのまま郷里にとどまることを決心した。森口はそれから

精力的に北上地域を調査した。また、この時期には花巻に疎開していた高村光太郎との親交もあった。文化ホールでの講演会には高村光太郎も招待され、森口の講演を聞いている。

森口が岩手の民俗の調査研究で気をつけたことは、「客観的に見る。」ということであった。「自分の生まれた、あるいは育った土地でも、客観的に、つまり異国人になってもものを見つめ、考えたものでなければ勝ちのある郷土誌とはいえない。私はこれを基本態度として岩手の山村を歩き、そして本を書いた。」と記している。

その後、深沢省三や舟越保武らと共に岩手美術研究所を設立した。戦後の岩手の美術教育・活動の原点となるこの研究所は、一九四八年（昭和二十三年）岩手県立工芸美術学校として設置される。森口は初代校長に就任した。森口はこの美術学校で美術論を講ずるとともに、ヴィーナス祭を催し、卒業証書を一人一人手渡すなど、自由な気風を創り出した。

さらに県立盛岡短期大学美術工芸科の校長・科長、岩手大学特設美術科教授（退職後は講師）、を務めた。また県文化財専門委員として民俗芸能や民俗資料の保存調査に力を注いだ。民衆の中に息づく民俗芸能や食生活・風習を取りまとめ多くの著書を出版しました。その際、収集した蔵書や研究資料は岩手県に寄贈され、県立博物館

や県立図書館に収蔵されている。

さらに、『水沢市史民俗編』の編集委員などを歴任した。その間、『美術八十年史』『西洋美術史上下巻』『鑑賞教育』『民俗の四季』『岩手県民俗芸能誌』『岩手年中行事』などを執筆出版した。

特に、水沢市と関連の深い著書は、『町の民俗』『民俗の四季』『黒石蘇民祭調査報告書』『水沢市史第六卷民俗編』『高野長英頌歌』などである。

森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」と記している。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、「岩手においても消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちはテレビや漫画にかじりついていて、自分の生まれ育った土地に結びつく楽しい思い出をもてなくなってきたが、将来と地を離れて暮らすときなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていた。このように、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗を大切にしてきた人であった。

多くの研究が認められ、数々の賞を受賞している。一九六三年（昭和三十八年）岩手日報文化賞、一九六五年（昭和四十年）河北文化賞、一九六七年（昭和四十二年）勲四等瑞宝章、一九八〇年（昭和五十五年）高野長英賞、一九八四年（昭和五十九年）五月、

盛岡市上田の自宅にて九十一歳の生涯を閉じ、北上市の染黒寺に葬られた。

***参考文献**

『森口多里 その足跡を辿る』

岩手大学アートフォーラム 『水沢市史』

水沢市



県立美術工芸学校校長時代（美工会『ミューズの花びら』より）